

## 特 集

# 組織と企業家活動

『企業家研究』第15号の特集「時代のコンテキストと企業家活動」に続き、今回、第2回の特集テーマを「組織と企業家活動」としました。テーマ設定に際しては次のようなことを考えました。

第1に、組織と企業家活動の関係については、マーシャル、シュンペーター、ガルブレイスなどが様々な見解を示しています。そこでは、企業家活動をもっぱら個人の業績とする見方もあれば、組織のプロセスや構造に埋め込まれているとする見解もあります。こういった古典の論争と関連したテーマ設定であれば、多くの投稿が見込めるのではないかと考えました。

第2に、シュンペーターの「新結合」という概念は、個人の業績として企業家活動を捉える色彩の強い概念ですが、それでも、新結合を事業として成立させるには、会社組織を構築する必要性もありそうです。こういった論点の追究があれば、企業家活動と組織の関係に関する議論を活性化できるのではないかと考えました。

それ以外にも、官僚制が企業家活動を妨げる側面に注目したり、組織を企業家のネットワークと定義したり、組織化のプロセスと企業家活動の関係を論点としたり等、このようなテーマであれば、当方の意図を超えた多様な議論も網羅できるとも考えました。

しかし、組織と企業家活動を関連づけるというテーマ設定は意外に難しかったのかもしれませんが。テーマ設定時の楽観的予想とは異なり、論説としての原稿投稿は4編に留まりました。さらに、査読審査の結果、掲載論文は、遠藤寛士氏による「日本交通の組織変革—川鍋一朗によるサービス差別化と組織メンバーの主体性喚起—」の1編となりました。

遠藤論文は、経営者の働きかけをきっかけとしながら、組織メンバーが外部と相互作用することで組織変革に独自の貢献を加えるメカニズムの一端を捉えようとしています。事例として、タクシー業界のトップ企業、日本交通株式会社の三代目

経営者、川鍋一朗による組織変革をとり上げています。本論文は、そのサブタイトルにもある「主体性」という概念に注目することで、企業家活動を企業家個人か組織のいずれかに単純に還元する以外の切り口を示唆するものと解釈できる点で、テーマ設定の際の期待に応えうるものでした。

最後になりますが、査読者の方々には、ご多忙の中、丁寧かつ的確な審査を頂いたことに心より感謝申し上げます。また、田中一弘編集委員長、江島由裕、鹿住倫世、島本実、廣田誠の各副委員長、粕谷誠前編集委員長には、編集準備や審査過程で様々にお助けいただいたことにお礼を申し上げます。なお、次回、第3回目の特集テーマは「企業家と意思決定」となります。関連するご研究に従事されているの方々には、是非ご投稿を検討ください。

特集担当エディター

伊藤 博之